

はじめに

■授業はやりがいのある仕事

私は「授業負担」という言い方があまり好きではありません。授業を好ましくないもの、できれば担当したくないもの、と捉えている言葉だからです。ただ、研究に専念したい研究者の立場では、授業を負担に思う気持ちが生ずるということも十分に承知しています。私も、もし自分の研究に打ち込んでいる最中に、中断して授業に行っていこうと言われてたら、あまりいい気はしないでしょう。

しかし、私にとって、授業はコミュニケーションの場であり、同時に、自分を向上させていける場であると思っています。自分が中心となって授業空間を作り出し、学生に働きかけ、学生を知的にかつ精神的に育む、そのためには自分自身を知的にも精神的にも鍛えておかなければならない、そのような点でとてもやりがいのある仕事だと思っています。

■本書のねらい

本書は、よりよい授業運営をめざしている先生方や若手の先生方に対してエールを送るものです。また、これから大学教員を目指す院生の方々にも参照してほしいと思っています。私はこれまで、非常勤講師を含めると、専門学校、短大、大学と、多様な環境、多様なクラスサイズ、多様なレベルの学生を相手に、数多くの授業をしてきました。また、専門職の方への研修講師、一般の方を対象にした講演、小中高生への公開授業も経験しています。そのような幅広い授業経験から多くのことを学

びました。そして、授業運営についてさまざまなことを考えてきました。私の経験や考えをブックレットの形にまとめることで、それを読んだ方が少しでも元気になり、少しでも参考になる何かを見つけてくださればという思いで、本書を執筆いたしました。

なお、本書では、対象とする授業の形態として、講義スタイルの授業を念頭に置いています。ゼミ・演習形式の授業や討論形式の授業についてはほとんど触れません。講義スタイルの授業がもっとも典型的な授業形態であり、授業運営について考える場合にもっともイメージしやすいからです。

また、私の専門である心理学の知見や理論をとところどころで後ろ盾にしていますが、大部分が私の経験や直観に基づく考察です。したがって、勝手な思い込みや科学的根拠に乏しい提案が含まれているかもしれません。内容の面でも、心理学やその周辺領域の授業を展開する場合にはあてはまるものの、まったく異なる分野の授業には向かないものもあると思います。

そのようにやや偏った内容を綴ったものではありますが、大学教育に懸命に取り組んできたひとりの大学教員の思いや考え方が伝わればと思っております。そして、お読みいただいた方それぞれに、授業運営についての新たなアイデアが生まれることを願っております。

■自分自身を振り返って

本書を書くにあたって、自分の大学教員としてのキャリアを振り返り、あれこれと考える機会を得たことは、私にとっては非常に意義のあることでした。自分の中でやや停滞気味になっていた授業運営へのモチベーションを再び高めることができ、

今後もさらに努力を続けていこうという気持ちが湧いてきました。

私にこのような機会を与えてくださいました東北大学高等教育開発推進センターの羽田貴史教授に、心より感謝申し上げます。

東北大学大学院情報科学研究科

邑本俊亮